

〈資料紹介〉 令和5年度公開の古文書から—小島家文書の新聞製本資料—

森田 順子

はじめに

埼玉県立文書館（以下、文書館）では、昭和四四年（一九六九）の開館以来、収蔵古文書の整理・公開を行い、毎年古文書目録を刊行している。

古文書の整理・公開は計画的に進めているが、諸般の事情で文書群の中の一部を先行して公開したり、目録刊行後に追加で寄贈・寄託を受ける場合もある。そこで令和五年度は、近年新たに寄贈・寄託を受けた資料に加えて、それら追加資料のある文書群の公開に努め、『諸家文書目録Ⅺ』⁽¹⁾を刊行した。今回追加公開した資料は、文書館開館当時に整理公開され、既に広く一般に利用されている文書群が多い。そして追加公開した資料には、これまで利用されてきた各文書群の内容に含まれなかった資料が見られる場合もある。小島家文書もその一つである。

小島家文書は、足立郡植田谷本村（現さいたま市）の小島昭三家に伝来した文書群で、昭和四六年（一九七二）に文書館に寄託された。昭和四七年（一九七二）に刊行した『近世史料所在調査報告八 諸家文書目録Ⅰ』（以下『既刊目録』）に収録され、六二七点が既に公開されている。その後、段階的に追加寄託がなされ、令和四年（二〇二二）

には所有者の代替わりを機に『既刊目録』に収録されている資料を寄贈していただけることとなった。さらに、追加寄託分も公開する段階で寄贈していただけるというお話をいただき、この度追加資料九三〇点の整理、目録編集を進め、令和六年（二〇二四）三月に小島家文書一五七九点は一括して当館所蔵資料となり、公開される運びとなった。既公開分の小島家文書は江戸時代の名主文書群の性格が強いが、今回追加分の資料は四分の三が近代資料で、小島家の家族が所蔵していた典籍・書籍・印刷物が多い。その中に、新聞の切抜を堅固な表紙を付けて製本した資料がまとまって見られる。本稿では、その製本した新聞資料を紹介したいと思う。

一 小島家文書について

(一) 小島家について

植田谷本村は足立郡の中西部に位置し、村内には鴨川が流れている。中山道大宮宿から西方約一里程のところにあり、当村からさらに西一里程のところに荒川が流れている。和名類聚抄に殖田郷とあげられた地域で、足立郡の土豪足立右馬允遠元の本領とされ⁽²⁾、小島家もその流れを汲む家と言われている。同家中興の元祖と称される宮内正重天

正六年没)から小島姓に改称したとされる。中興三代八右衛門家正は、慶長十九年(一六一四)に関東郡代伊奈氏に植田谷領三ヶ村(植田谷本村・飯田村・三条町村)の割元名主⁽³⁾を命ぜられ、幕末に至るまで世襲した。江戸時代後期には勘太夫を代々襲名している⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

なお、小島家が源頼朝の側近であった安達藤九郎盛長の子孫を称しているという説もあるが⁽⁶⁾、そのことに触れた文書が今回追加公開となった資料の中にある。中興七代栄重(元文元年没)記の先祖書を十三代陽之助(明治三十九年没)が写した書付で、それによると、安達盛長の子孫であるのは中興の祖正重であるという。正重は出羽国の生まれで、弘治二年(一五五六)に母子の縁に因り植田谷郷の小島義重の家を驛寓し後に藤原姓安達氏を棄て嗣子となったとし、小島氏が安達氏の子孫であるという惑を解くと記している。写しであるので検証の余地はある。この資料も今回は紹介にとどめておく⁽⁷⁾。

(11) 小島家文書の概要について

小島家文書は、『既刊目録』では①江戸幕政当初の貢租形態を知り得るもの、②伊奈氏の知行地植田谷領三ヶ村の割元名主に関するもの、③植田谷本村新田の開発に関するもの、④荒川大囲堤・鴨川堤の争論に関するものなどに大別される⁽⁸⁾。今回追加公開した資料にもこの分類に含まれるものも見られる。その他としては、前述したように近代文書が多く、小島家に関するもの、典籍・書籍・印刷物、なかでも十五代の鼎五(昭和二六年没)が足立郡植水村(現さいたま市)⁽⁹⁾等で教員として勤めていたこともあってか教育関係の書籍、資料も多い⁽¹⁰⁾。小島家文書は昭和四一年(一九六六)に一括で大宮市文化財(古文

書)(現在はさいたま市文化財)に指定されており、その史的価値は早くから認められている。指定名称は「小島勘太夫家文書」となっている。

なお、新聞製本資料以外の小島家追加資料の全容については、令和六年(二〇二四)三月に刊行した『収蔵文書目録第六二集 諸家文書目録Ⅺ』及び『文書館収蔵資料検索システム』から御覧いただきたい。

二 小島家文書の新聞製本資料について

小島家追加資料に含まれる新聞製本資料(以下、製本)は八二点ある。これらの製本を構成する新聞切抜には発行年月日が無いものもあるが、それらは内容等から年代(時代)を推定し、主に新聞発行年月日を元に編年順に一覧にしたものが別表である(本稿末)。最も古い明治三六年(一九〇三)から最も新しい大正八年(一九一九)年までの一六年間のもので、それ以降のものは見つからない。

切抜きされた新聞は『国民新聞』⁽¹¹⁾、『埼玉新報』⁽¹²⁾、『報知新聞』⁽¹³⁾の三紙である。八二点のうち国民新聞が七五点、埼玉新報が五点、報知新聞が二点である。

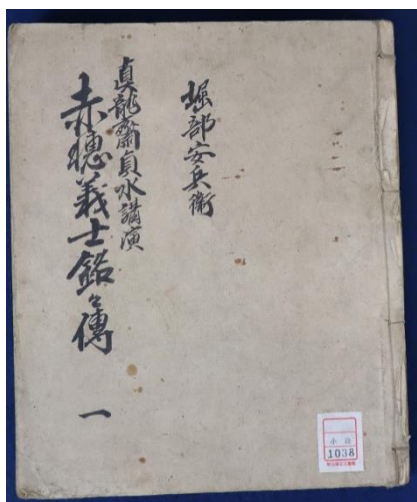
八二点のうち五六点、約七割は連載された講談や小説の切抜の製本であるが一部別の記事も含まれ、年代や記事内容によって形状に若干の違いが見られる。概ね三タイプに分けられるので順に紹介する。

(1) 表紙付き製本

前述した講談・小説類の製本がこれに当る。

装訂は和装本の四ツ目綴じだが、書型は和装本の規格をやや外れて

いるものもあり、こちらも墨書と朱書がある。(図1、2参照)



【図1】表紙付の例
「赤穂義士銘々傳 一」
No.1038 (小島家文書番号、以下同)

いる。天地が二三cmから二六cm前後、左右はおよそ二〇cmなので、大本(美濃本) (14)の異型とも言えなくもなく、やや意識していたのであろうか。厚さは内容によって二cmから五cm程度と差がある。
厚紙の表紙を付けている(図1)。該当の記事部分を含めた紙面が袋綴じした場合に前述した大きさになるように新聞紙面を切り、整えて綴じている。表紙の内側の扉に当る部分は、新聞一面を折り込み二重にしている。この部分は裏にもある。この扉に使用されている新聞紙面は株式市場や銀行公告欄が多い。扉に使用する紙面を決めていたのだろうか。

小口書もされているので、これらの製本は書棚に横積み(平置き)されていた様子がうかがえる。他の典籍類と同様に収蔵されていたのだろうか。一方で背書があるものもある。和装本と言っても厚みがあるので洋装本のように縦置きすることも可能である。(図3)



No.1039

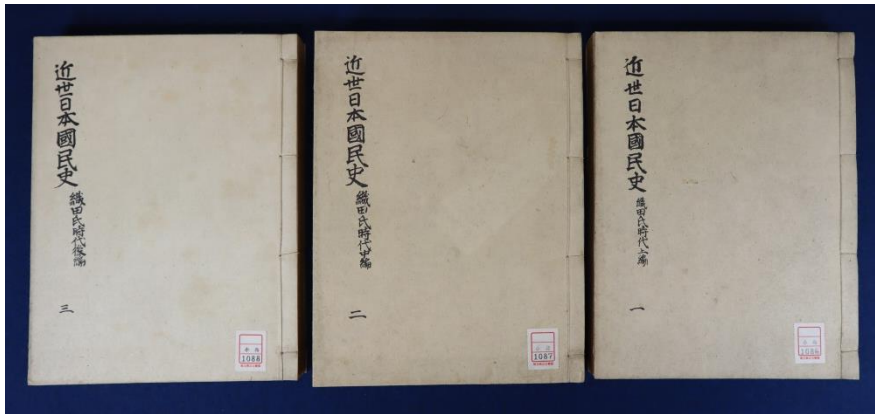


No.1062

【図2】扉題の例

↑ 背書 (No.1047)
【図3】 小口書→
(No.1044, 1045)





【図 4】上「近代日本国民史」1~3 (No.1086~1088)
下「食道楽 上、下」(右からNo.1095, 1096-1)

この表紙付きの製本の内容であるが、先述したように新聞に連載された講談・小説が大半である。なかには『国民新聞』主宰徳富蘇峰⁽¹⁵⁾の評論もあり、通史『近代日本国民史』の初期の連載も製本している

「食道楽 下」付箋部分



(図 4 上)。また二点のみある『報知新聞』は、編集者でもあった村井玄齋⁽¹⁶⁾の大ベストセラー『食道楽』の製本である。小説に登場する料理について付箋に書かれて貼られているのは興味深い(図 4 下)。

製本一冊内は外題の作品や記事のみであることがほとんどだが、なかには他の記事が途中に綴じられている例もある。例えば別表 No. 80 (文書番号一〇六一)の『雛暦 下』(大正八年)の中には大日本帝国憲法制定三〇年の特集記事(二月一日)や福島安正大将⁽¹⁷⁾死去の記事が綴じこまれている。製本作成者の興味がある記事、重要と思った記事は一緒に綴じていたのであろうか。

(2) 共表紙製本

書型は前述した表紙付きの製本と同様である。厚紙による表紙は無く、表紙付きの場合の扉にあたる新聞二重折の部分のみの製本である。外題はその扉部分に墨書してあるので、正確に言えばそれが表紙となっている。綴じは紙縫りによる仮綴じである(図 5)。

小口書、背書は無い。

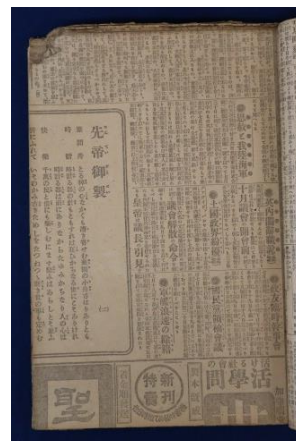
表紙付の製本よりも頁の新聞も雑然としており、すべて同じ大きさに整えてあるわけではなく、大きいものが折られて綴じられたり、大きさが若干足りない頁もあったりする。また、一部が切り取られている場合もある。

内容は天皇御製などの皇室関係の連載コラムや評論、その他の記事の雑綴りである(図 5)。小説でも表紙が無いものが二点あるが、むしろこれは例外で、内容によって表紙を付けるか付けないかを決めていた可能性がある。

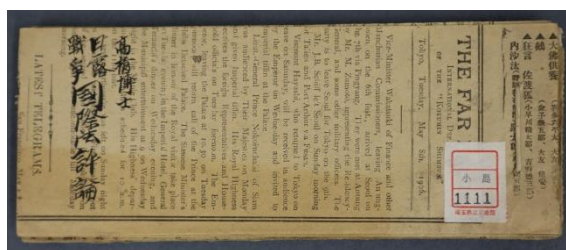
(3) 三つ切本型製本
書型は横本で、天地およそ8cm、左右およそ20cm。装訂は和装本の三つ切本に近い。一ヶ所を糸や紙縫りで仮綴じしてある(図6)。外題は書かれていないものと無いものがある。内容はコラムや評論などである。この製本の場合は記事の部分のみを切つて綴じてあるので、横長の小本の書型となったのであろう。この三つ切本型は十冊あり、すべて明治時代のものである。初期の形なのかと考えたが、これらより古い明治三六年の『食道楽 上』は(1)の表紙付製本なので、内容によって区別していたのであろうか。



【図5】 共表紙の例
右:No.1079
左:No.1078
上:表紙
下:記事



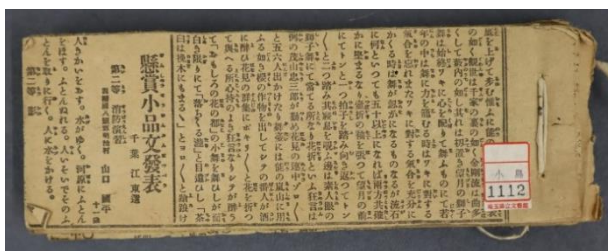
さてこの製本の作成者だが、年代から類推すると小島家十四代の雅四郎(大正一〇年没)かその次の代の鼎五ではないかと考えられる。雅四郎は、常陸国真壁町の市塚家から小島家十三代陽之助の養子になったということが記された資料がある(18)。今回公開した小島家の典籍資料にも「市塚」の印が捺されているものも見える。市塚家から持参したものなのか、小島家に入ってから「市塚」の印を使用していたのかは不明だが(19)、雅四郎の蔵書が多い可能性が考えられる。さらに、この製本、特に表紙付製本は小島家の人物自らが行ったのか、誰か他の者あるいは業者等に依頼したものなのかという点も疑問に思う。



【図7】 三つ切本型の例

上:外題あり (No.1111)

下:外題なし (No.1112)



おわりに

本稿では、小島家が所蔵していた新聞製本資料について甚だ雑駁に資料を紹介したのみで終わった。本文でも触れたように、この製本の所有者・作成者、作成の方法等不明点を残したままである。

今回、文書館収蔵古文書の他の文書群を「新聞」というキーワードで検索し実見した限りで、悉皆調査はできていないが、新聞の切抜を所蔵していた家はある。ただ、切抜を紙縫り等で簡単に綴ったもの、一部を糊で止めたもの、封筒に入れたもの等はあるものの、小島家のようにしつかりとした製本をしたものは未だ見つけられていない。筆者の浅学のためもあるので、他館も含めてさらなる調査が必須である。本稿が、名主家の蔵書状況や近代新聞資料等の種々の研究の一助となれば幸いである。

最後になりましたが、今回資料をご寄贈くださいました小島陵氏とご家族の皆様にご改めて心より感謝申し上げます。また、本稿をまとめるにあたり、追加資料の整理を行った文書館古文書担当の伊藤由佳氏、関口真理子氏ほか関係各位に御礼申し上げます。

註

- (1) 収蔵文書目録第六二集 諸家文書目録 XI『埼玉県立文書館、二〇二四』。なお、今集から冊子体の刊行は文書館閲覧室参考図書用のみとし、PDF版をホームページに掲載する^①版となった。
- (2) 『新編武蔵風土記稿』巻之百五十四 足立郡之二十 植田谷領
- (3) 近隣十数ヶ村から数十ヶ村の名主達と代官や郡代らとの間で法令の伝達や年貢の取りまとめ、訴訟の調整等を担った名主の代表格。苗字帯刀を許され、扶持を給されていた例もある。
- (4) 『近世史料所在調査報告八 諸家文書目録Ⅰ』（埼玉県立文書館、一九七二）
- (5) 『埼玉県史料 武蔵国足立郡植田谷本村小島家史料』（埼玉県地方史研究会、一九七二）
- (6) 前掲註 2、4、5 参照。
- (7) 小島家文書 No. 二二七 「先祖書」
「埼玉県北足立・新座郡役所」の野紙に書かれ、所々推敲の跡があり。草稿か。
- (8) 前掲註 4、5 参照。
- (9) 明治三二年（一八八九）町村制施行に伴い、植田谷領本村は周囲の六村と合併し植水村となる。
- (10) 小島家文書 No. 二二八 「履歴書」による。なお、日記や郵便等の記述から鼎五の一代前の雅四郎も学校関係者だったことがうかがえるため、教育関係の蔵書は雅四郎のものも含まれる可能性がある。

- (11) 徳富蘇峰が明治二十三年(一八九〇)に創刊した日刊新聞。現在の「東京新聞」の前身の一つ。
- (12) 明治一〇年(一八七七)に創刊された埼玉県の地方紙。二度の廃刊を経て、明治三二年に第三期が始まった。
- (13) 明治五年(一八七二)前島密らによって創刊された「郵便報知新聞」が前身。明治二十七年「報知新聞」と改題。戦時下の新聞統合により昭和十七年(一九四二)読売新聞に併合された。その後何度かの曲折を経て、昭和二十四年に読売新聞スポーツ紙として再出発した。
- (14) 『国文学研究資料館春季通常展示 和書のさまざま・書誌学入門』 凶録(国文学研究資料館、二〇〇七)より。以下、和装本の書型や名称については同書を参照した。
- (15) 明治から昭和期にかけて活躍したジャーナリスト、評論家、歴史家、政治家。文久三年(一八六三)・昭和三年(一九五七)。
- (16) 明治・大正期に活躍したジャーナリスト、小説家。文久三年(一八六三)・昭和二年(一九二七)・六三)・昭和二年(一九二七)。
- (17) 陸軍大将。十ヶ国語以上に通じた情報将校。日露戦争でも謀報部において活躍した。嘉永五年(一八五二)・大正八年(一九一九)。
- (18) 小島家文書No.一一一九「常陸国真壁町市塚家系譜」
- (19) 他にも、市塚の名で記された万控帳や市塚宛の封筒、年賀状等も残る。明治三十九年頃までは市塚姓も併用していた可能性がある。なお雅四郎は筑陰の号で詩作を行っていたとみられ、詩稿や添削詠草、結社とのやりとり等の文書も残っている。

表 小島家文書新聞製本資料一覧表

No.	表題	年月日	著者	新聞	文書番号
1	食道楽 上(新聞切抜)	[明治36.1.]	[村井]弦齋居士	報知新聞	1095
2	食道楽 下(新聞切抜)	[明治].	[村井]弦齋居士	[報知新聞]	1096 -1
3	[日曜講壇](明治37年6月5日~8月28日、新聞切抜)	明治37.6.5	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1114
4	[旅順必死の抵抗他戦争関連記事綴](新聞切抜)	明治37.8.27		国民新聞	1117 -3
5	[東郷司令長官奉答他綴](新聞切抜)	明治[37].8.		[国民新聞]	1117 -1
6	日露戦争国際法評論(新聞切抜)	明治37.10.4	大学教授 高橋法学博士講述	国民新聞	1111
7	[米僊瑣談](48~64、新聞切抜)	[明治37]甲辰..		国民新聞	1115
8	[麻布両宮の御歌・御製他綴](新聞切抜)	明治38.1.9		国民新聞	1117 -4
9	豊太閤(新聞切抜)	[明治38].	[山路]愛山生	国民新聞	1056
10	侠客国定忠次 全(新聞切抜)	[明治40.4.28]	真龍齋貞水講演	国民新聞	1047
11	八軒長屋 後篇(新聞切抜)	明治40.9.7	[村上]浪六	国民新聞	1084
12	赤穂義士銘々伝 一(新聞切抜)	明治41.4.23	真龍齋貞水講演	国民新聞	1038
13	赤穂義士銘々伝 二(新聞切抜)	明治41.8.9	真龍齋貞水講演	国民新聞	1039
14	赤穂義士銘々伝 三(新聞切抜)	明治41.11.22	真龍齋貞水講演	国民新聞	1040
15	小説 煩悶病院(新聞切抜)	明治41.12.1	[村上]浪六	国民新聞	1057
16	[鉄筆・懸賞川柳・懸賞都々逸他綴](新聞切抜)	[明治41].		[国民新聞]	1112
17	加藤清正(徳富蘇峰著「自発論」・山路愛山著「加藤清正の事」他、新聞切抜)	明治42.2.7	[徳富蘇峰・山路愛山外]	国民新聞	1076 -1
18	赤穂義士銘々伝 四(新聞切抜)	明治42.4.18	真龍齋貞水講演	国民新聞	1041
19	[本場所国技館大相撲・秩父暴動談他綴](新聞切抜)	明治42.5.10		国民新聞	1074
20	[国民文学・雑多覚](新聞切抜)	明治42.8.6.		国民新聞	1068
21	稲田一作 後篇(新聞切抜)	明治42.8.26	[村上]浪六	国民新聞	1071
22	赤穂義士銘々伝 五(新聞切抜)	明治42.9.16	真龍齋貞水講演	国民新聞	1042
23	雑集(「於菅破例日記」・「嗚呼春畝先生」・「四十七士伝」他新聞切抜)	明治42.9.27	[巖谷小波・山路愛山・古澤滋]	国民新聞	1109
24	小説 紅梅お色 全(新聞切抜)	明治42.12.8.	緑旋風[三宅青軒]	国民新聞	1100
25	赤穂義士銘々伝 六(新聞切抜)	明治43.2.8	真龍齋貞水講演	国民新聞	1043
26	小説 馬鹿野郎(新聞切抜)	明治43.5.11	[村上]浪六	国民新聞	1101
27	赤穂義士銘々伝 七(新聞切抜)	明治43.8.2	真龍齋貞水講演	国民新聞	1044
28	小説 女優菊園露子 全(新聞切抜)	明治43.9.27	緑旋風[三宅青軒] 作	国民新聞	1102

29	赤穂義士銘々伝 八(新聞切抜)	明治43.11.10	真龍齋貞水講演	国民新聞	1045
30	赤穂義士本伝及外伝(新聞切抜)	明治44.3.24	真龍齋貞水講演	国民新聞	1046
31	小説 変化島田(新聞切抜)	明治44.4.27	渡邊黙禪	国民新聞	1082
32	娘問題(新聞切抜)	[明治44.5.10]		国民新聞	1075
33	幡随院長兵衛(新聞切抜)	明治44.9.[12]	真龍齋貞水講演	国民新聞	1105
34	今日史(正月~6月、新聞切抜)	明治45.1.1		埼玉新報	1110
35	毛谷村六助(新聞切抜)	[明治45.1.1]		埼玉新報	1097
36	田宮坊太郎(新聞切抜)	[明治45.5.11]		[埼玉新報]	1089
37	[文芸界消息・常磐会詠草他綴](新聞切抜)	[明治].]		[国民新聞]	1113
38	[随鷗吟社例集聯句・文芸界消息他綴](新聞切抜)	[明治].]		[国民新聞]	1116
39	[世論概観他綴](新聞切抜)	[明治].]		[国民新聞]	1117 -2
40	寛永御前試合(新聞切抜)	大正元.8.3	早川貞水講演	国民新聞	1062
41	明治天皇御製(新聞記事切抜)	[大正元.8.8]		国民新聞	1078
42	仙石騒動(新聞切抜)	[大正元.8.21]		[埼玉新報]	1050
43	乃木大将伝(新聞切抜)	[大正元.10.2]	発行兼編輯人 小池定雄	国民新聞	1070
44	元禄奇談 上総木綿(新聞切抜)	[大正元.12.18]	桃川燕二講述	埼玉新報	1083
45	[薩長論・時務一家言・慶喜公の事](新聞切抜)	大正2.3.10	[山路愛山・徳富蘇峰]	国民新聞	1108 -1
46	大岡政談 天一坊(新聞切抜)	大正2.5.10	早川貞水講演	国民新聞	1093
47	小説 鬮八万石(新聞切抜)	大正2.5.17	渡邊黙禪	国民新聞	1058
48	竹の園生(宮廷記事新聞切抜)	大正2.8.31		国民新聞	1077
49	[大岡政談 孝子九助・黄金の奇禍](新聞切抜)	[大正2.9.22]	早川貞水講演	国民新聞	1103 -1
50	小説 女王国(新聞切抜)	[大正2.10.31]	伊藤銀月	国民新聞	1094
51	天保水滸伝(新聞切抜)	大正3.1.26	早川貞水講演	国民新聞	1092
52	小説 伽羅丸(新聞切抜)	[大正3.5.18]	渡邊黙禪	国民新聞	1064
53	小説 まごころ(新聞切抜)	[大正3.12.24]	五竹園主人作	国民新聞	1053
54	世界の変局(新聞切抜)	大正4.3.14	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1085
55	新門小金井義侠伝 全(新聞切抜)	大正4.3.24	早川貞水講演	国民新聞	1104
56	[埃帯・放浪漫記・鉄の人](新聞切抜)	[大正4]乙卯.[3.27]	[大谷光瑞・馬場恒吾]	国民新聞	1107
57	小説 さくら子 一(新聞切抜)	大正4.7.19	渡邊黙禪 作	国民新聞	1098
58	大久保彦左衛門 一(新聞切抜)	大正4.10.25	早川貞水講演	国民新聞	1072
59	御大典彙報・昭憲皇太后・日光廟三百年祭(宮廷記事他新聞切抜)	[大正4.11.1]		国民新聞	1079
60	小説 さくら子 二(新聞切抜)	[大正4.12.4]	渡邊黙禪 作	国民新聞	1099
61	大久保彦左衛門 二(新聞切抜)	大正5.2.28	早川貞水講演	国民新聞	1073
62	大正の青年と帝国の前途(大谷光瑞著「放浪漫記」・蘇峰著「一系和尚」他、新聞切抜)	大正5.3.1	[徳富]蘇峰生外	国民新聞	1069
63	花あかり(新聞切抜)	大正5.4.17	後藤宙外作	国民新聞	1059
64	笹野権三 上(新聞切抜)	大正5.7.13	早川貞水講演	国民新聞	1051
65	墨染(新聞切抜)	[大正5.7.26]	岡本綺堂作	国民新聞	1081
66	笹野権三 下(新聞切抜)	大正5.11.14	早川貞水講演	国民新聞	1052
67	天眼通 天(新聞切抜)	大正6.2.14	なみ六[村上浪六]	国民新聞	1065
68	兒雷也(新聞切抜)	大正6.3.11	[真龍齋]貞水	国民新聞	1090 -1
69	天眼通 地(新聞切抜)	大正6.6.26	[村上]浪六	国民新聞	1066
70	佐野鹿十郎(新聞切抜)	大正6.9.23	田邊南龍口演	国民新聞	1091
71	支那漫遊記(「十二年目の漫遊」・「遊支偶録」新聞切抜)	[大正6.9.]	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1106
72	[天眼通後編]川徳(新聞切抜)	大正6.11.15	なみ六[村上浪六]	国民新聞	1067
73	里見八犬伝 上(新聞切抜)	大正7.4.10	猫遊軒伯知口演	国民新聞	1054
74	夫婦橋(新聞切抜)	大正7.4.22	五竹園主人作	国民新聞	1063
75	近世日本国民史 織田氏時代上編 一(新聞切抜)	大正7.7.1	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1086
76	里見八犬伝 下(新聞切抜)	大正7.8.1	猫遊軒伯知口演	国民新聞	1055
77	雑暦 上(新聞切抜)	大正7.8.31	小林天外作	国民新聞	1060
78	後藤又兵衛 上(新聞切抜)	大正7.10.28	桃川如燕講演	国民新聞	1048
79	近世日本国民史 織田氏時代中編 二(新聞切抜)	大正7.11.8	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1087
80	雑暦 下(新聞切抜)	大正8.1.6	小林天外作	国民新聞	1061
81	後藤又兵衛 下(新聞切抜)	大正8.2.9	桃川如燕講演	国民新聞	1049
82	近世日本国民史 織田氏時代後編 三(新聞切抜)	大正8.3.19	[徳富]蘇峰生	国民新聞	1088

凡例：本表の配列は年月日順である。

年月日は同一冊中最も古い記事のものから採った。発行年月日が無いものは内容等から推定した。